

趣旨説明

滑 田 明 暢
(立命館大学大学院)

それではタイトルにありますとおり、シンポジウム「インタビューにおける相互行為を探る：役割の変化が立ち現われる瞬間に注目して」を始めさせていただきますと思います。本日はご来場いただきありがとうございます。本日司会を務めさせていただく立命館大学大学院の滑田明暢と申します。それでは、早速ですけれども、簡単な企画の趣旨説明と背景、登壇者の紹介をさせていただきますと思います。

心理学研究におけるインタビュー実践には、臨床的面接と調査的面接とがあると言われてきています。今回のシンポジウムでは調査的面接の方を扱いたいと思います。皆さんもご存知のとおり、調査的面接は構造化されたもの、半構造化されたもの、非構造化されたものに分けられると言われていますが、その中でも、半構造化されたものや非構造化されたインタビューが今回のテーマとなる質的心理学に関わるインタビューであると考えられます。

こういった質的インタビューはインタビュアーが参加しているためにそのインタビューから得られたデータは複雑となり、分析が難しくなるというような批判もあります (Potter and Hepburn, 2005) が、質的心理学を代表するデータ収集の方法の一つであるというふうに考えられます。例えば、過去9年間の質的心理学研究に掲載された論文を見ていくと、約90本のうち全体の32%である29本の論文において、インタビューがデータ収集の方法として用いられています。

図1の円グラフを見ていただくとわかるように、インタビューは、フィールドワークも含めた参与観察と並ぶ、質的研究の代表的なデータ収集の方法であるということがわかります。図2の折れ線グラフは、過去9年間の質的心理学研究に掲載された論文で用いられていたデータ収集法を示したもので

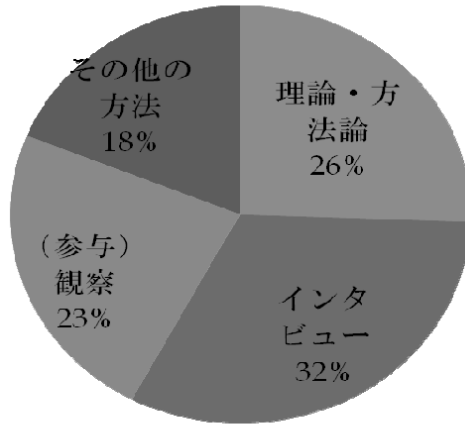


図1 過去9年間の質的心理学研究に掲載された論文における各データ収集法の使用数の全体に占める割合

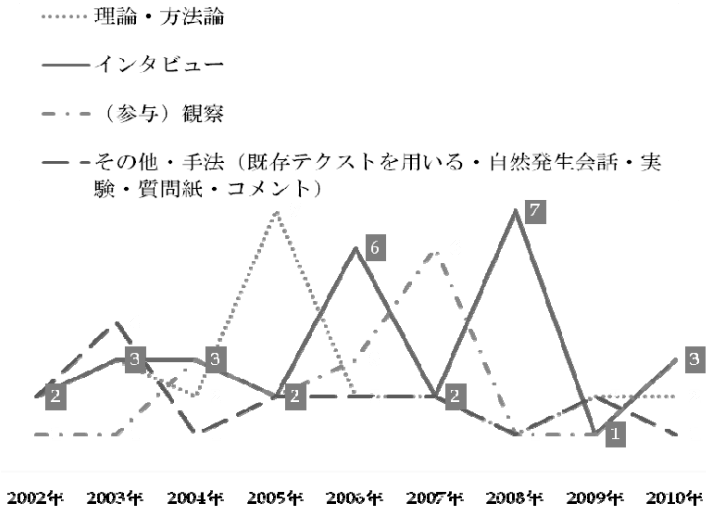


図2 過去9年間の質的心理学研究に掲載された論文において用いられたデータ収集法の数の推移（数字は年ごとのインタビュー法が用いられた数）

すが、例年コンスタントに、インタビューがデータ収集の方法として使われていることがわかります。このように、年ごとに用いられる頻度をみても、インタビューは質的研究法のなかで中心的役割を果たしているデータ収集の方法であるということが言えるかと思えます。

では、この質的インタビューというのはどういったものなのかということを考えますと、生きられた経験を尋ねるものであったり、その参加者が何か重要なことをしゃべってくれることを前提とするものがインタビューであると言えます。そのインタビューがもつ特徴は、まず前提として、インタビューは聞く人と聞かれる人によって行われる場所であると言えます。さらに、オープンクエスションを用いることで、個人のストーリーやその話し手の語りが広がるような形で話を聞いていくというのが一つの質的インタビューのやり方として行われてきているように思います (Gough and Madill, 2007)。

ただし、インタビューというものは、話し手が独立した存在として話をしているわけではなく、聞き手もそのインタビューの場にかかわっているといったような、相互行為によって行われているという主張もされるようになりました (e.g., Raplay, 2001; Roulston, Baker and Liljestrom, 2001; やまだ, 2006)。より近年になりますと、インタビューは、聞く人と聞かれる人のそれぞれが文脈を持ち寄って交流する場であるといった主張がされています (e.g., 斎藤・山田, 2009)。インタビュアーとインタビュイーがどこか独立した空間で、ある一つの場や空間をつくっているわけではなく、それぞれが持っている経験などをそのインタビューの場に持ち込んでやりとりをしているというようなことが、2009年の質的心理学フォーラムでも議論されています。

本シンポジウムでは、こういった背景を踏まえて、インタビューはそれぞれがその背景文脈を持ち寄って相互に構成しているという場や空間であるにとらえます。そして、その場や空間の中で、調査者と協力者あるいはインタビュアーとインタビュイーがどのようにやりとりを行い対応し合っているのかを微視的視点でもって検討することが本シンポジウムのねらいとなります。

議論の題材として、まず岡山大学、日本学術振興会の福田茉莉さんから「難

病患者を対象としたQOL調査から」の話題提供を行っていただきます。その後、「家族内の役割分担を尋ねる調査から」を題材に私の方から報告をさせていただきます。そして、化粧行為の調査から、京都大学の木戸彩恵さんからも続いて話題提供を行っていただきます。3つの話題提供の発表の後、広島大学教授の中坪史典先生、京都大学の安田裕子先生から指定討論をいただき、その後フロアの皆さんの意見を交えての議論をしていきたいと考えております。

【引用文献】

- Gough, B. and Madill, A. (2007). Diversity and subjectivity within qualitative psychology. *ESRC National Centre for Research Methods Working Paper Series, 1*, 1-28.
- Potter, J. and Hepburn, A. (2005). Qualitative interviews in psychology: Problems and possibilities. *Qualitative Research in Psychology, 2*, 281-307.
- Rapley, T.J. (2001). The art (fulness) of open-ended interviewing: Some considerations on analysing interviews. *Qualitative research, 1*, 303-323.
- Roulston, K.J., Baker, C.D. and Liljestrom, A. (2001). Analysing the researcher' s work in generating data: The case of complaints. *Qualitative Inquiry, 7*, 745-772.
- 斎藤清二・山田富秋 (2009). 討論：特集インタビューという実践 質的心理学フォーラム, 1, 66-70.
- やまだようこ (2006). 非構造化インタビューにおける問う技法：質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス 質的心理学研究, 5, 194-216.